

# アントニン・レーモンドの 「リーダーズ・ダイジェスト東京支社」

—RD「構造論争」・再考— そして、ル・コルビュジエの影響(Ⅲ)

松野高久(環境デザイン研究所)



アントニン・レーモンド(1888-1976年)  
(Raymond in the early 1950s)

## 7. ル・コルビュジエの影響

### ①ル・コルビュジエの南米チリの「エラズリス邸」と

#### A・レーモンドの軽井沢の「夏の家」

私は、最後となった軽井沢の「新スタジオ」のアトリエ行きに選ばれて同行することになった。A・レーモンドは実に海外の建築雑誌に眼を通して、ある日、私に、「この建築家はすばらしいが、名前を知らぬ」と海外の建築雑誌を示したが、それはルイス・カーンの「ソーグ研究所」(1965年)であった。

A・レーモンドは、1933年、軽井沢に最初の別荘「夏の家」を建て、『アーキテクチュラル・レコード』誌(1934年5月)に発表した。(図1-A・B・C)

それを見たル・コルビュジエは、自分の計画案の南米・チリの海岸の「エラズリス邸」(1930年)とそっくりなのを知り驚いた。コンクリート造であったが、中柱のみ細い円柱であった。ル・コルビュジエは2冊目の作品集(1935年)に「エラズリス邸」(図2)の頁にA・レーモンドの「夏の家」の写真と図面を載せて、

「ここで問題になっている写真は私たちのではなく、レーモンド氏のデザインした家なのだそう！こんなことが言えるだろうか。これは、<巨匠同士の出会いである>のだそう！とにかく私たちにとって親しいアイデアが使われた建物が方々に建つのはうれしいことだ。」

そして日本の建築技術が優秀なことを付け加えている。A・レーモンドは、ル・コルビュジエ宛に釈明の手紙を送り、その返信も届いた。A・レーモンドの『自伝』(鹿島研究所出版会1970年)によると、1935年5月7日付でパリからル・コルビュ

ジエより次のような手紙をA・レーモンドは受け取っている。

あなたの4月8日付けの手紙は、外国旅行から帰ってから受け取りました。・・・しかしあなたが自分でいっておられるように、そちら側に少々過ちがあります。すなわち、東京で「例の家」(註:「夏の家」)——本当になかなか良い家です——を発表された時、一言も私に言って下さらなかったことです。・・・つまり私の考えはけちなものではなく、反対に、日本の技術的能力への讃辞、賞讃でした。また、あなたの翻案の程度についても、さらにいうならば、あなたは私のアイデアの翻案にあのように成功しておられる。・・・実際には、私も模倣をしばしばしております。しかし手際も悪く、混乱し、愚かな模倣なのです。ですからこの点で私はお世辞がいえるのです。・・・どうかレーモンドさん、私の意図をお汲み取り下さい。私は何の恨みも買いたくありません。ここに書いている言葉は、よろしかったら何なりとお使い下さい。・・・この手紙をどう使おうと完全に自由だと申し上げ、あなたに納得していただきましょう。私の最善の気持を信じて下さい。 ル・コルビュジエ

このル・コルビュジエの「見事な翻案」と評した返信を、A・レーモンドは西麻布の事務所のアトリエの壁に掛けていたことを懐かしく思い出す。A・レーモンドはこのことを誇らしく思っていたのである。この「夏の家」は現在、軽井沢のレイク・ニュータウンの塩沢湖に近い所に移築されて、フランスの画家の「レイモン・ペイネ美術館」となっている。(参考:『ル・コルビュジエ—建築・家具・人間・旅の全記録』、エクスナレッジ 2002年)

ブルーノ・タウトは1935年8月5日の日記に、軽井沢でA・レーモンドと会ったときに、A・レーモンドについて「ル・コルビュジエの模倣者・模写者であり、在日建築家として成功を収めてい



図1-A A・レーモンドの「夏の家」  
(出典:『アントニン&ノエミ・レーモンド』神奈川県立近代美術館 編/丸善/2007年)

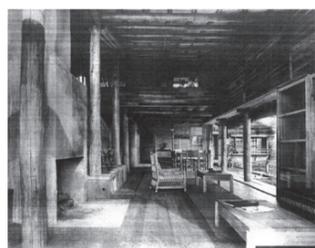


図1-B 「夏の家」居間  
(出典:同左)

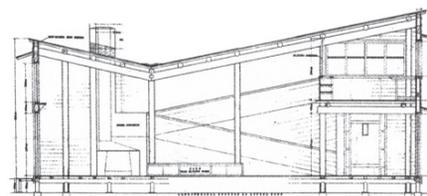


図1-C 「夏の家」断面図  
(出典:同左)

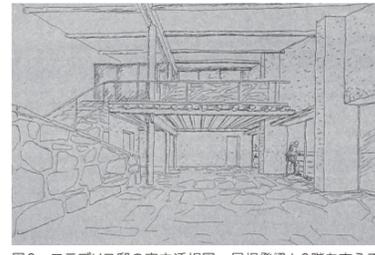


図2 エラズリス邸の室内透視図。屋根登梁と2階を支える大梁が平角材の2枚梁になっている。ほかは全て丸太材。床と左手の斜路の壁は石張り  
(出典:『ル・コルビュジエ 建築・家具・人間・旅の全記録』/エクスナレッジ/2002年)



図3 「葉山の別邸」外観  
(出典:『私と日本建築』A・レーモンド/鹿島出版会/1967年)

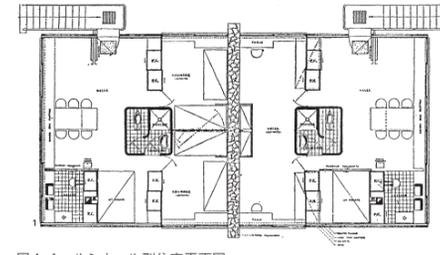


図4-A ルシウール型住宅平面図  
(出典:『建築十字軍—アカデミーの黄昏』ル・コルビュジエ 著、井田 安弘(訳)/鹿島出版会/2011年)

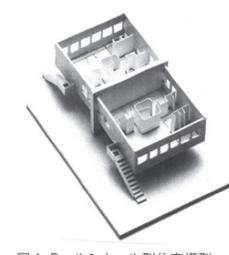


図4-B ルシウール型住宅模型  
(出典:『ル・コルビュジエの全住宅』東京大学工学部建築学科安藤忠雄研究室/TOTO出版/2001年)

る。この国の嫌らしいコルビュジエ流行は、レーモンド氏などに主たる責があると云ってよい。」と、A・レーモンドの「夏の家」のル・コルビュジエ模倣について書いている。

「エラズリス邸」のル・コルビュジエの内部スケッチを注視すると、丸太柱と天井の梁を合せ梁にする原型はここにある。それは後に細い杉の丸太柱やRD東京支社のようなコンクリート造であっても窓サッシュ外側の独立した斜めの円型鋼管柱へと移行する。A・レーモンドの木造柱の「芯外し工法」では通常の場合柱は室内側にあるが、木造の「葉山の別邸」(1957年)(図3)では、テラスの柱は上部が外へとはり出して、RD東京支社とは逆の傾きに傾斜している。この「夏の家」は日本の住宅デザインに木骨構造による可能性の技法を示した。

### ②ル・コルビュジエの「プラン・ルシウール」と

#### A・レーモンドの「RD東京支社」

1930年まで、ル・コルビュジエのアトリエに在籍していた前川國男は「プラン・ルシウール」(1929年)を、つまり1928年から1929年まで「ルシウール型住宅」という最小限住宅を担当した。その真筆図(図4-A)がある。

前川國男は、座談会「国際性・風土性・国民性」(『国際建築』1953年3月)において、

20年来、私の関心は日本の建築からコンクリートの壁を抹殺してこれを近代建築のスタートラインに立たせたいということでありました。理由はもちろん、平面の流動性と構造の経済性に重点があったことはいうまでもありません。

それは、「ルシウール型住宅」つまり2つの住宅の境界壁以外は、「ドミノなるもの」のように、細い2本の柱とフラットスラブで軽く自由な壁で形成され、経済的な住宅として、日本のそれまでの耐震壁つき剛接ラーメンの耐震構造への実現を求めていた実状に対する離反から、耐震壁の撤退を求めていた。

『建築十字軍—アカデミーの黄昏』(ル・コルビュジエ著 井田安弘訳 鹿島出版会 2011年)の「解説鼎談」前川國男+藤井正一郎+井田安弘)の中で、前川はこの「ルシウール型住宅」について「最小限住宅」として説明している。

これは要するに、7メートル×7メートル49㎡、夫婦と子どもで4人のスタンダードの家族の入る家を、ルシウール法案のプログラムに従ってやったわけ。・・・要するに、ミュール・ミトワイアンという壁を作っけね。壁に寄っかかるようにして、ここに2本の柱が立っているでしょう。鉄骨のね。それに壁に寄りかけて梁を渡して、こういう家をつくる。・・・このプランをやっている最中に、コルビュジエが、ぼくのところにやってきて、構造がこういうふうにとまる前に、要するにこの構造は、この家だけを目当てに考えられた構造じゃまずいぞということをしきりに言っとったね。だから、これを組み合わせて大きな家もつくれるんだぞということを書いていたと思うんです。(傍線筆者)

この構造体は中心軸の石積みの境界壁(ミュール・ミトワイアン)で、各住戸毎に2本の鉄骨柱が屋根と2階床を支持する。2階の境界壁体と反対側の外壁面は水平連続の全面ガラス面で、この構造体を連続してつなげるとRD東京支社となる。(図4-B) 2戸の住宅の境界壁のみが石積みで、正方形平面の内部をコアや収納の間仕切り、可動間仕切りと折りたたみベッドが使われている。1階は階段室や玄関のあるピロティで独立柱が2本ないしは1本が見える。石積み壁(ミュール・ミトワイアン)と反対方向の窓面は広く開放された連続窓である。前川はこのミュール・ミトワイアンの描き方が上手だと、ほめられたと記録している。当時、ル・コルビュジエは「私の下肢が支えているのが私の体」と言ってピロティの列柱によって建造物を支持するコンセプトを多く採用していた。それは、このピロティを「人体」にたとえる記述は重要で、後にA・レーモンドは「リーダーズ・ダイジェスト」について書いた「打ち放しコンクリートについて」(1961年)には「建築の本当の骨組みが人体の骨格のように現れる。日本の古い絵にも同様な手法が用いられている。」と、RD東京支社の躯体の概念について告白している。「ルシウール型住宅」の長手断面は、何とRD東京支社の短辺断面と実に良く近似している。

ル・コルビュジエは、「技術はリリスムの受け皿」(1929年1月)に、

ピロティは計算の成果であり、経済性(高貴な意味においてです)に対する現代の思考の優美なる到達点であるのです。ピロティ。それは定まった位置に正確な計算に基づいて正確な荷重をいかなる無駄もなく支持させるということであるのです。(傍点 ル・コルビュジエ)

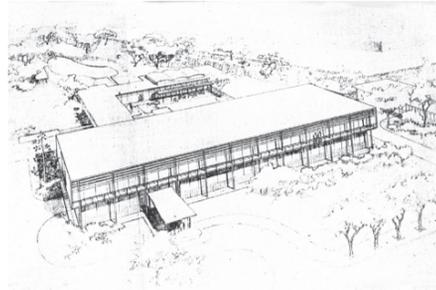


図5 RD東京支社案(1950 レーモンド加筆)  
(出典:『国際建築』1950年7月)

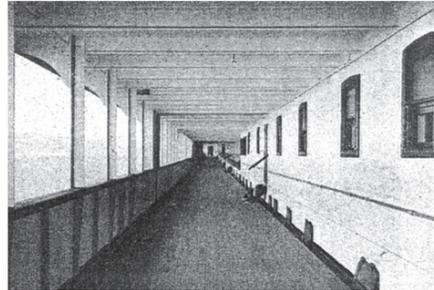


図6 アキタニア号  
(出典:『建築をめざして』吉阪隆正訳/鹿島出版会/1967年)

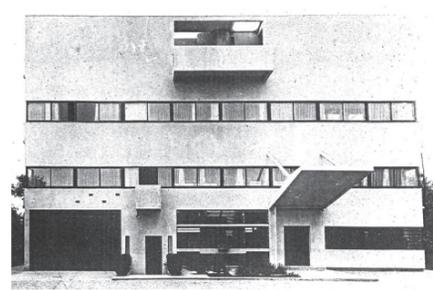


図7 「スタイン邸」(ガルシエの家) 1928年  
(出典:『ル・コルビュジエ展 カタログ』毎日新聞社/1996年)

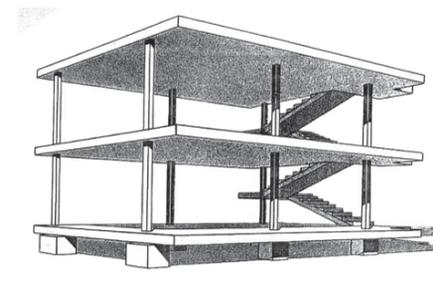


図8 ドム-イノ住宅  
(出典:ル・コルビュジエの生涯) スタニスラウス・フォン・モース 著  
/住野天平 訳/彰国社/1981年)



図9 三重大学レーモンドホール  
(出典:『LIVE ENERGY』2016年)

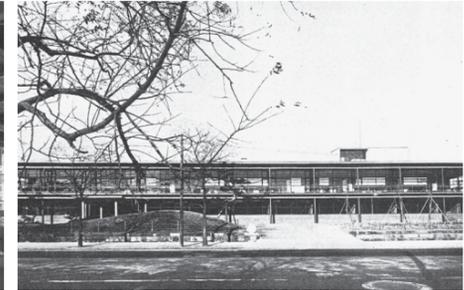


図10 南側全景 撮影/平山忠治  
(出典:『私と日本建築』三沢浩訳 1967年 鹿島出版会)

同様なことをA・レーモンドは、「打放しコンクリートについて」(1961年)にRD東京支社について具体的に、

コンクリート打ち放し仕上げを採用する理由は、それが実用的であり、同時に美しいからである。これは構造体と一体になった、永久的な仕上げ面であるというよりは、むしろ構造的要素の一部をなすものである。鉄筋の被覆を極度に薄くすることによって、単位コンクリート量当たり、より軽快な、したがってより経済的な構造が得られる。より軽量なら、地震によるモーメントも小さくなるし、したがって又基礎も小さくてすむ等々の利益がある。打ち放しコンクリートの表面は、固くて容易に損傷を受けるものではない。

(傍線筆者)

日本で初めて打ち放しコンクリートを採用したのは、A・レーモンドと言ってよい。その理由の一部がわかる。後に慶應義塾大学第二研究室「萬来舎」で、谷口吉郎の設計監理に研究生として担当した由良滋氏は「記念性へのコラボレーション」に、

ところが、仮枠を外してみると各所にジャンカ(モルタルが脱落し骨材だけが残る豆粒状の不良部分)ができてしまったのである。さっそく補修に詳しい経験のあるアントニン・レーモンド事務所に行き、指導を受けた。・・・私は教えられた通り、無心で経木を叩き、木目を写しつづけて補修工事は無事終わった。

この経木を濡らして貼り付け、半乾きの時点で取り除き、柱の木肌仕上げに合わせて補修する方法は、私がレーモンド建築設計事務所時代でもまだ用いられていて、現場で監理技師の大渡最蔵氏から直接指導を受けたが、杉板仮枠でない今日の合板仮枠では役に立たない方法である。

コンクリート打ち放し仕上げは、建築総重量を軽減させるための一方策であった。

何故そこまで総重量を軽くする必要があったかは、「重くて不経済な『耐震構造』の分厚い壁を取っ払って建物の自重を軽くし、経済的で透明感のある空間の実現のために『耐震構造』を克服することで、ヨーロッパの近代建築と同質の<空間性>をこの日本の地にも獲得することが可能である」との松隈洋氏の「戦後日本近代建築の出発点」(『建築文化』1991年1月)にある。

続けて、由良滋氏は、

私が学生時代(註:東京美術学校)に働いていた建築事務所は、戦後、レーモンドを迎える準備事務所を兼ねていた。所長からレーモンドの来日直前、RD東京支社の透視図を画くように指示され、一週間夢中で仕上げ、レーモンドにお見せした。イサム・ノグチがこのRD東京支社の庭を造ることと私の体験が重なり、何か不思議に思えた。

昭和22年には、東京内幸町の鷺塚事務所で旧所長がレーモンド東京事務所再編を図っていた。その所長とは鷺塚誠一のことである。

この透視図(図5)は由良の描いたものであろうか。未だイサム・ノグチの彫刻や園庭が描かれていないから初期のものである。

当初から透視図を描くことは入社のためのテストであったと三沢浩氏の記録があるが、私の時にはそれは既に実施されていなかった。それと立面図の原図には「天野」とサインがしてあった。天野正治で美術学校卒で後に役員となり、私の上役のこともあった。

### ③「アキタニア号」のデッキの写真(『建築をめざして』)と「RD東京支社」

ル・コルビュジエは『建築をめざして』(吉阪隆正訳 鹿島出版会 1967年)には、商船<アキタニア号>の写真に(図6)

建築家諸兄へ。全部窓となった壁、光一ぱいな部屋。壁に穴をあけてつくれ、その両側に陰の部分できて、部屋を淋しくさせ、光がきつく感じるために、カーテンでこの光を弱めなければならぬわれらの家屋と何という対照。

遠洋航海汽船のデッキは、「全部窓で光が一杯に満ちた部屋」である。そして続けて、

建築家諸兄へ。長い散歩廊の価値、満足な面白いボリューム。

そして「建築は光の下に集められた立体の正確で壮麗な演出である」と汽船は「運輸の道具」ではなく、「船舶の中に旧来の

のろわれた桎梏からの解放を発見するだろう」と、それがガルシエの「スタイン邸」(1928年)の居間が、屋上テラスが遠洋定期船の艦橋のように、「船舶は新しい精神によって組織された世界実現への第一段階にある。」と、デッキのように作られていたとの定評である。

この汽船のデッキは、光が満ちあふれ、長い散歩廊のような空間は、まったくA・レーモンドの「リーダーズ・ダイジェスト社」の事務室のようである。

以上、①, ②, ③にはともに、ル・コルビュジエの「ドム-イノ」システムで、その延長に1926年に発表された「近代建築の5原則」もこのシステムを具体的に示した。(図8)

「ドム-イノシステム」の基本は「3枚の床板」と「6本の柱」と「1つの階段」というシンプルな要素からなり、荷重を支えるのは柱だけで可能になり、壁が担ってきた役割を分離させ、窓の大きさや、部屋と部屋との間仕切りなどを自由に設定できるようになった。RD東京支社はこの「ドム-イノ」システムの延長である。以上のようにRD東京支社にはル・コルビュジエの影響が顕著である。

### ④「ドム-イノ」システム — 独立柱

このシステムでは床板は、ジョイストスラブ(細い梁の連続)の中空となっていた。その結果、壁の位置は自由になり、平面は自由度が増し、立面はカーテンウォールによる「自由で大きな」ファサードが可能となった。外壁や間仕切り壁が不要になり、その後ル・コルビュジエの「新しい建築の5つの要点」、「近代建築の5原則」(1926年)の理念として、「スタイン邸」となり、近代建築の国際様式の中核として「サヴォア邸」(1931年)となる。日本のモダニズムの「白い箱」の建築と正反対の方向であった。

ル・コルビュジエの『伽藍が白かったとき』(生田勉・樋口清訳 岩波書店 1957年)には、1935年のアメリカ旅行で摩天楼に、ル・コルビュジエはそこに「太陽・大空・空地・樹木」の調和を見た。それがアメリカであった。RD東京支社に日本のお濠端であるから、アメリカのRD社の支社として日本の「太陽・大空・空地・樹木」をA・レーモンドは表現した。

### ⑤三重大学レーモンドホール

『LIVE ENERGY』(2016年vol.112)の「評論 現代建築考」

(42)に藤森照信著の「三重大学レーモンド」(図9)が載っている。戦後すぐの1951年に三重県立大学の図書館としてつくられた「木造モダニズム」で横長の平面の中央部に棟持柱を方杖で登り梁を支えている。外側の丸柱は「芯外し」の手法で全面ガラス窓の外観を可能にして、藤森氏はこの手法を「ル・コルビュジエの原案(エラズリス邸)より巧みに実現してみせた」と、ル・コルビュジエが1914年に発表した鉄筋コンクリートの「ドム-イノ」と評してもいいだろうと書いている。鉄筋コンクリートのRD東京支社と全く同時期に「三重大学レーモンドホール」は、レーモンド建築の構造を担当した岡本剛の紹介であった。

### 8. 平山忠治の写真

写真家の平山忠治は『眼の力・平山忠治』(建築家会館発行 1996年)の宮内嘉久との対談で、リーダーズ・ダイジェストの「B5版新建築」(1951年)の時に、

打ちっ放しコンクリートというのは、初めてあそこで見たんだよ。それで、レーモンドが自慢して、よくこんなきれいなのをやってくれたと、ぼくらに言ったよ。アメリカでも、あんなきれいな打ちっ放し。あれ、竹中が・・・それでだ、あの翌年かなんかに、レーモンドはアメリカへ帰ったわけよ、出張したわけよ。そのときに、ぼくにつくらせたリーダイの写真を持って行って(アーキテクチュラル・フォーラム)へ売り込みに行ったわけだ。それで(フォーラム)がその気になって、かなり大きくぼくの写真をパーッと見開きしたりして、夜景の写真なんか。それが外国に原稿を送った初めてだ。・・・

そうしたところが、ぼくがおったまげたのは、(フォーラム)から当時の金で見開きの一枚を、どう計算をしているんだか知らないけれど、百三十ドルだか、当時の金でだよ。

その平山の優れた写真を掲載する。(図10)

工事施工は竹中工務店で同社の池田末造は、「RD東京支社建築工事に就いて」(『建築雑誌』1951年11月)に、A・レーモンドから「精密機械を造る様な構想のもとに施工せよ」との指示を受けたことを詳説している。

## 9. 丸太木造建築—「仮設の本設化」

先日、内田祥士氏から「アントニン・レーモンドの木造架構形式について—聖ポール教会と箕町の自邸兼事務所を事例として—」（『日本建築学会 計画系論文集』第80巻第716号2015年10月）を呈送された。いわゆる「レーモンドスタイル」と呼ばれる「木造モダニズム」の成立の経緯について書かれている。その中で「レーモンドの主張」として注目すべき発言の抜粋は、

- ・「私はヨーロッパやアメリカによって影響を受けたのではなく日本から影響を受けた。」（対談「秩序と混沌」『現代日本建築家全集 1.アントニン・レーモンド』1971年）
- ・「日本の建築は、いかに貧しいバラックでも、必ず中に美しいものを持っている。」（『私と日本建築』SD選書 鹿島出版会 1967年）

つまり、内田氏は「バラック小屋あるいは仮設屋根の技術が組み入れられている」と、「木造モダニズム」は「現場仮設」から始まったとする。「箕町の自邸兼事務所」つまりA・レーモンドのアトリエ及び住宅の架構形式を検討することで、経過が判明すると言う。A・レーモンドは「仮設の本設化」という課題と取り組み、しかし見事に成功しているように見えると結論する。確かにRD東京支社の建設現場（1949年～1951年）には、レーモンド設計事務所の戦後の仮事務所は木造であった。A・レーモンドは『自伝 アントニン・レーモンド』（鹿島研究所出版会 1970年）で、

事務所はその建築現場におかれ、私は自ら詳細に至るまで監督し、毎日、建設を指図した。・・・その敷地の中に建てた臨時の事務所は、安い不揃いな丸材でまったくのバラックであった。

その後の「アメリカ大使館員宿舎」（1951年～1952年）でも、われわれは先ず館員宿舎をデザインし、2度目の現場事務所をそこに建てた。その時は足場丸太を用いて、大分ましな建物をつくっ

たが、当時、東京で得られる何にもまして、居心地の良い快適なものととなった。

確かに木造の足場丸太による「仮設の本設化」が着々と進んでいた。そしてこの現場も終わりに近づくと、事務所と住宅を建設する土地を探し、西麻布の箕町に600坪の土地を見つけ建設を始めた。

トラスや母屋材には和風の丸太架構技術を使い、本来の正直さ、卒直さ、単純さ、特に経済性を取り込むことができた。これは、その当時の疲弊した日本にとって最も重要なことであった。建物全体に統一システムがあり、基準の6尺（1.81m）ごとの柱が、18尺（5.45m）スパンを架けるボルト緊結の足場丸太トラスを支えている。部屋を分ける構造壁は使わなかった。・・・なおこの建物は、数え切れぬ例が示すように、次第に日本の建築家を刺激することになったのである。（図11-A）

上記記述している私は、この事務所で過ごした日々と空間が懐かしく思い出される。この事務所の独立丸太柱の柱脚はコンクリートスラブの上に金具を立ててのピン・ジョイントであった。三沢浩氏はこの事務所+アトリエ+住居の建設には、「ほとんど図面を必要としなかった」と言っているが、その理由は、大工や技術者の蓄積もあるが幾度もの現場小屋、仮設事務所としての試行錯誤という技術の積み重ねが、鉄状梁の小屋組の木造丸太建築を可能にしたといえる。後にこの木造事務所は移転のため解体されることになったが、その解体は一瞬の内に終了し、その構法のすばらしさに所員一同が歓心したことを記憶している。A・レーモンドの軽井沢の2番目の「新スタジオ」（1963年）は私も夏の2カ月間、A・レーモンドと他の所員と最後の夏をこのアトリエで過ごした思い出がある。中央の鉄筋コンクリートの円形暖炉に12本の登梁が傘のように鉄状トラスのように架かっている。（図11-B）RD東京支社の長大な支持壁の替わりに点としての支持柱となっている。同種構造の延長例である。

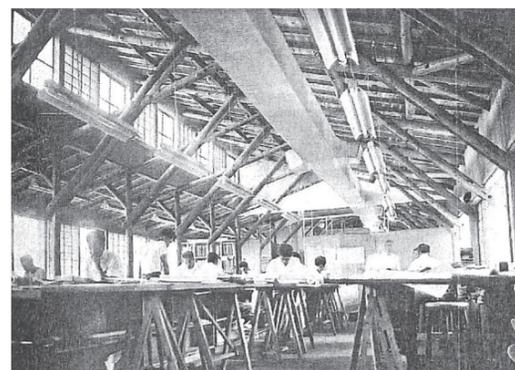


図11-A 「箕町のレーモンド事務所」製図室の内部  
（出典：『A・レーモンドの建築詳細』三沢浩／彰国社／2005年）

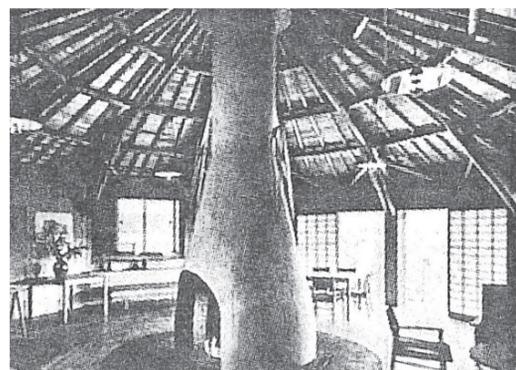


図11-B 軽井沢の新スタジオ  
（出典：同左）

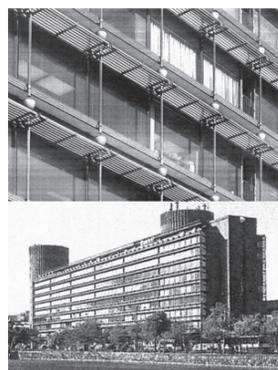


図12 パレスサイドビル全景（下）、パレスサイドビルディテール（上）  
（出典：『モダニズム建築の軌跡』INAX出版／2000年）

## 10. 本論の発議と最近の技術による構造解析について

本企画を発案し、私に委嘱してきたレーモンド建築設計事務所の元同僚の花村秀樹氏は、

私は、松野さんより1つ歳下ですが、昭和23年頃から神田に住んでおりRD東京支社が建設される前の状態から建設され竣工した経過を子どもながら憶えております。敗戦後荒廃した東京を憶えております。サンケイ新聞や大手町の周辺は有刺鉄線で囲われ中に国防色のカマボコ兵舎がありました。進駐軍のジープが砂埃をあげて走ってくると、それを追っかけてガムやチョコレート、キャンディを買っていた子どもでした。

そんな時、いつも遊び場だった現・北の丸公園には近衛師団の旧舎そのままでした。そこで暗くなるまで遊んでの帰路、たまたま車が通過する竹橋の石畳の坂の真中を下ってゆくと坂の真中辺りから右側にRD社を見下しました。あたりが暗くなってRD社のルーバーから射す光には子どもながら感動していました。何と美しい建物なんだろう！RD社は、焼け野原に忽然と現れたのです！レーモンドはあれほど嫌っていたフランク・ロイド・ライトでしたが（私は、レーモンド夫妻から直に幾度も聞いております）戦前のとりわけ横浜にあった建築がライトの影響をもちに受けたものでした。それがどうしていきなりRD社が現れたのか？これが研究の発端です。

花村の少年時代のRD東京支社との原体験、彼はその建物の中まで入ったことがあるそうだが、彼の「RD東京支社が日本古来の木造建築がヒントになっているように考えている。この解析が必要と考えています」との建築家ではない彼の直感を私をこのRD東京支社の解析へと向かわせた。次の段階は、構造設計者の金田勝徳氏（構造計画プラスワン）によるRD論争の分析と、最近の技術を駆使しての構造解析を予定している。

同じく私と同年代の旧友のK嬢は少女時代にRD東京支社近傍の共立女子中高に通っていたから見たことがあると思いついてきた。当時は首都高速道路もなく、神田方向に抜けて眺めも良かった。私は高校生の時に目にしたが、外国の施設だと思いつ中に入らなかったような不鮮明な記憶しかない。

RD東京支社は1964年に毎日新聞が入る「パレスサイドビルディング」に建替えられたが、13年間の短い命であった。A・レーモンドには、その解体の連絡もなかったように話している。しかし、A・レーモンドは抗議文を『新建築』誌上に掲載したそうだ。生前、「私の設計した建築は将来総て日建設により建替えられるだろう」とよくジョークで話していたことを思い出した。

その「パレスサイドビルディング」（図12）は、日建設の林昌二の設計で1966年に完成したが、その設計について、林昌二は、

もちろん、レーモンドさんにも了解を得たんです。「レーモンドさ

んのRD東京支社の模型を作って、どこかに置こう」という話もありましたが、レーモンドさんはその「必要はない」といわれたようです。しかし、ああいう名作を壊して次の建築をつくるのは非常に責任の重い話でした。（『モダニズム建築の軌跡 60年代のアヴァンギャルド』内井昭蔵監修 INAX出版 2000年）

この「パレスサイドビルディング」は、「RD東京支社」の残像を林昌二はデザインに取り入れていた。水平の全面ガラスのカーテンウォール、アルミ・ダイキャストの足場状の水平ルーバー、そして漏斗状の接続部のある雨樋は正しく「RD東京支社」のバルコニーにある鋼管柱と近似していた。東西両端の4カ所の堅シャフトの外壁には赤褐色の煉瓦積で、1階の窓部の腰の煉瓦積のようであった。林昌二はその言質通り、A・レーモンドのデザインを踏襲していた。

結論として、RD東京支社の設計「原則」は、第1に、ル・コルビュジエの「ルシウール型住宅」に採用されている「ドム-イノシステム」の応用例であり、耐力壁を中心軸として鋼製の円柱が連続している。それは軽井沢の「夏の家」や自邸・アトリエの木造の独立柱の構造体の「木造モダニズム」が鉄骨鉄筋コンクリートに変化した構造である。戦後の米国のヒートポンプエアコンなどの設備技術により可能となった開放的な空間であり、日本民家の「距てなき結合」つまり天井までの間仕切のない一室空間のフリープランである。日米仏の「共通の永遠の原則」による技術の融合である。

最後にA・レーモンドは友人のフランス人の詩人であるポール・クローデルがこのRD東京支社の敷地周辺を大変喜んでいたことを自伝に書いている。谷口吉郎も「総合美について」（『心』総合文化誌20・5）の座談会で、

例えば、東京なら江戸時代に作られたお濠端などには、今よりももっと都市作りに積極性があった。フランスのクローデルなんかも過去の東京は非常に美しいと思っています。

クローデルはそのお濠端を毎日散歩し、美しい詩を残している。そのような場所にRD東京支社は建てられたが、その透明性をもって十分に景観的に美しい統一をもたらしたに違いない。（了）

本稿を作成するに当たり、東工大の建築学科の同級生の山田孝延氏の協力を得たが、厚く御礼申上げたい。

### 執筆者プロフィール

松野 高久（まつの・たかひさ）  
1944年東京都浅草に生まれる。1968年東京工業大学理工学部建築学科（清家研究室）卒業。同年、株式会社レーモンド建築設計事務所入所。建築設計の傍ら1997年第1回長塚節文学賞・最優秀賞「矢を負ひて艶れし白き鹿一長塚節臨死歌考」を受賞。1993～96年日本工業大学建築学科非常勤講師。「長塚節研究会」の常任理事。2005年株式会社環境デザイン研究所入所し現在に至る。主な著書に「ロゴスの建築家 清家清の「私の家」そして家族愛」（明文社 2018年）がある。2020年に谷口吉郎建築論を出版予定。